Ryosuke Shimoda

インタビュア:西尾・鍋平・前本・阿部・水野



総評:建築の設計から風景の設計へ

全員:こんにちは。では早速本題に入るんですけ ど、まず今回の卒業設計の全体の印象をいただ きたいです。

霜田: うーん。全体の印象か。まずやっぱりコロ ナ禍ということでね、ちょっと例年とは少し違う雰 囲気だったかなっていうふうには思いますが、あ の制作のクオリティっていうのは全体的によく考え られてるものが多くって、皆さん頑張りとですね、 その作品に対する熱意のようなものを感じた良い 講評会だったんじゃないかなという風に思います。 これと、年々なんとなく増えている感じがする制 作の傾向があって、それは建築単体の設計とい うよりかは建築がその対象地域に置かれることに よってですね、これから起こりうるであろう未来の 物語のようなものを風景化していくというような試 みがあったっていうのが興味深かったかなってい うふうに思います。

西尾:なるほど。ランドスケープの観点といいま すか、その意味からちょっと気になった、印象深 かったと感じる作品はありますか?

霜田:私が吉原賞の時にこの点数入れているの は、そういう作品がほとんどなんですね。で、例 えば阿部ほなみさんの歩行そのものが居場所に なるっていうのはまさしく私が今言った状況を体 現しているものであるし、上山くんのやつは、複 数の建築を既成市街地じゃなくて既存の集落の中 に置くことによって、新たなその外に開かれる部 分とこれまであった閉鎖系の領域っていうものを アップデートしていくというような提案だったので、

それは高く評価したいと思います。それと、あと 西尾くんの庭がつくるまちっていうのも、面白かっ たですよね。まあ2票までしか入れられなかった から入れなかったんですけど、私が西尾くんのや つもいいんじゃないかな、いいっていうかランド スケープ的に見て面白い提案だったかなっていう ふうに思います。崖を全部庭園化しちゃおうって 言う提案だったのかな。確かね。あと海岸のまち の提案 ...。寺西さんの「街の文化と記憶を紡ぐ庭 園」っていうのは、個人的にも見て面白かったで すね。あとちょっと毛色が違う提案だけど、渋谷 の劇場でしたっけ。劇場なんだか、町なんだかよ くわからない提案っていうのも、あれもほんとラン ドスケープ的だなぁっていう風に思うんですよね。 だから私が評価したのは、ある空間があって、そ れが多面的に捉えられるもの。例えば劇場として 作ってるんだろうけど、あまり劇場に見えないって いうか、まちに見えちゃうって言うものとか、そう いうやり方が1つと、あともう1方が庭っていう キーワードで、空間を再構築していこうと言うよう なものですね。その2つぐらいかな。方向性とし て私が評価したものは。

「歩行そのものが居場所になる」 阿部ほなみ→p68 「街区裏でつながる赤津焼の街」 上山源喜→ p100 「庭がつくる街」 西尾昂紀→p28 「街の文化と記憶を紡ぐ庭園」 寺西遥夏→p20 「渋谷の砦」 前本哲志→p162

西尾: なんか今回かどうか分からないですけど、 僕も含め建築だけが作る空間の面白さとかそうい うのじゃなくて周りとの関係を作っていこうみたい なのが多かったなぁっていう印象を受けたんです けど、普段ランドスケープの設計をされる時に、 建築との関わりっていうかどういう風に設計を進 めていくのかが気になったんですけど、教えてい ただければ ...。

霜田:まず実際のプロジェクトの場合は対象地が あるわけですよね。敷地があるわけです。で、そ こで建築を建てる部分と、ランドスケープの設計 としてその場全体を調えていくっていう作業があ る。ただやっぱり敷地という土地は、建築とラン ドスケープの設計でも共有しているわけですよ ね。いわばコモンズのようなもので。その場所を どうしていくかといったことの方向性をお互いに コミュニケーションして、共有するということです ね。場所と方向性を共有するということです。そ れがうまくいかないと社会性とか地域性を伴うプ ロジェクトにはならないんじゃないかなっていうふ うに思いますね。私が前々から言ってるんだけど、 ランドスケープにしても建築にしても何か空間を 作るっていうことは、地域性と社会性とユーザー の日常性というのが関わってくるもんですよ。そ の3つの指標でプロジェクトっていうのは評価さ れるべきだと思っているので、だから設計段階で そういうことをちゃんと話合って、取り込まないと だめなんじゃないかなっていうふうに思います。

西尾:なるほど。具体的にいうと唐丹小学校のよ うに、ランドスケープの一体となった建築もある なっていうのもすごい印象を受けるんですけど、 具体的にどういう感じで進んでいったのかなって いうところについて、詳しく聞きたいんですけど ...。

霜田: これは、去年の卒制のインタビューでも答 えた気がするんですよ....

「都市と自然の本質は変わらない」

西尾: そうなんですが、でも霜田さんの事もたく さん聞きたいなと思ってます。まず、好きなまち についてお聞きしたいです。

霜田:まちはね、まあどこも好きなんですよね。 すごい田舎や、土地のコンテクストの感じられな い埋立地だと何もないじゃんって言われるんだけ ど、私は何もないまちはないと思ってるし、必ず ちょっと掘り下げればなんかあるんです。なので、 何もない町っていうのはありえないし、好きとか 嫌いとかっていう概念ではないんですよね。だっ て、みんなそうでしょ。逆に言うと嫌いな街とかあ

西尾:その質問は何か聞かれたことないから...。

阿部:でも街区が大きい街とかだと歩きにくくて、 嫌いってわけではないけど、苦手だなって思いな がら歩いてたりはします...。埋立地の方とか、み なとみらいの方とか...。

霜田: そういうのも特徴じゃないですか。

阿部:確かにこれからはそういうのも含めて面白 がれるかもしれないです。

霜田:面白いと思うんです。 なんか歩いている ところなんて、こう地面の表層部分だし、どんな 場所でもちょっと掘り下げれば地層があるわけで あって、これまで土地の履歴みたいなものが堆積 してるわけです。

阿部:掘り下げるって物理的に ...。

霜田: 物理的にです。 物理的に掘り下げるとその 土地の大地としての基層が見えてくるわけだから、 そういうのを見るのが私は好きですね。どこのかっ ていう平面的な捉え方はあんまり好きじゃないで す。断面切りたいんです。(笑)

阿部:最近、断面切って印象に残ったまちの方が 例えとしてはいいですかね。

霜田:最近、断面切ったまちって。(笑)

西尾:プロジェクトを進めてる中でとかでもいい んですけど。

霜田:プロジェクトねー、最近面白いなぁと思っ ているのはいろいろあるよね。ランドスケープの プロジェクトってどのプロジェクトもまず掘り下げ るんですよ。で、掘り下げるとさらに好きになっちゃ うから。どんな場所でも、私はいけますよ。

西尾: なるほど。オールラウンダーなんですね。 では、霜田さんは留学の経験もあると思うんです けど、ランドスケープが日本と海外で違うことは、 ありますか?

霜田:日本と海外で違うことか。場所によってやっ ぱ違うんだよね。日本と海外っていうよりかは、 地質がやっぱ違う部分があるし、あと地面に育つ 植物の種類も違うので、、表面的にはやっぱ仕事 の進め方とかは違う部分もあると思うんですけど、 ランドスケープの設計で言うとやっぱ扱っている 物が違うので…。この質問もすごい答えにくいで 西尾:なるほど。わかりました。 す...。

前本:例えば歴史に対する時間などが日本と西洋 には大きな差があると思うんですけど、そういっ たことが浮き彫りになるっていうことは無いんです か?

霜田:歴史の捉え方ですか。歴史のある国ってい うのはやっぱその歴史を重んじます。アメリカな んかは歴史が浅いから、人の歴史ということにつ いては、捉え方は日本とは違うかなと思いますね。 むしろこう、人の手の入っていない時代がアメリ カの場合は長いので、自然環境に対する捉え方と いうのはすごく深掘りする傾向があるかなという 風に思います。

前本:日本は、どちらという言い方が良いのかわ からないですけど、どう思われますか?

霜田:近代以前の街の作られ方がやっぱ日本とア メリカとかヨーロッパと違うと思うんですよ。例え ば、ヨーロッパは、森林が広がっていたところを かなり開拓して、都市を作っていった経緯があり ますけど。日本の場合は、現代は別にして、それ 以前はそこまで大規模に開拓して都市を作るって いうことってあまりやってこなかったので、歴史も そうだけど、都市への考え方ってのがやっぱ違う んじゃないかっていうふうに思います。

西尾:僕が講評の時に霜田先生に、これは庭を 作っているだけで暮らしの部分がまだ詰めれてい ないんじゃないかみたいなことを言われたことが 印象的なんですが、ランドスケープを設計すると きに、日常性や暮らしの部分はどういうふうにお 考えですか?

霜田: 生業にどう関係しているかどうかは結構大 きいかなと思うんですよ。その途中で生きていく ためのリソースとして、その空間があるのかどう なのか、現代の都市に生活して別にそこまで必要 じゃないんだけど、空間はね。毎日仕事して通 勤してっていう生活してる限りは。だけど、コロナ 禍でそのあたりの考え方が変化している。変化し つつある中で、今一度、身の回りの日常的な空 間のあり方の価値っていうのが変わりつつあると 思うので、そういう観点から、西尾くんの発表な んかも何か言ってくれればよかったんじゃないか なっていうふうに思う訳ですよ。

霜田:空間の提案はもちろん必要なんだけど、そ れに紐付けされたような人々の暮らし、生業って いうものが、どうなのかということを自分なりに評 価して言ってくれた方がいいと思うんですよ。そ れは聞く人にあまり委ねすぎてる案ってのはちょっ と分かりづらいんじゃないかなって思いますよ。

西尾:ありがとうございます。次に、都市の中っ ていうのと自然の中で考える違いとか、逆に共通 して考えることとかそういうお話を伺いたいです。

霜田:あんまりそこらへんの区別って実はしてな いんですね。あの一、ちょっとあれだな、話が長 くなるな、これすると。

西尾:全然、時間はあります。(笑)

霜田: ちゃんと説明するためには準備しなきゃい けないので、今日ちゃんと答えられるか分からな いんですが…。都市についての本があってね、私 が好きで、すごくインスピレーションを受ける本 があって、『都市という新しい自然』っていう本が あるんですよ。日野啓三さんのこの本、知ってま す?知らないか。

西尾:知らないですね。

霜田:『都市という新しい自然』っていう、一言 で言うと、この人は都市っていうものと、都会って いうのは違うって言うんですよ。都会っていうのは、 そのいわゆるアジアの都市的な、わいわいがや がやするような、人がいっぱい行き交っているよ うな状況であると。都市っていうのは、自然や自 然物、人の存在が無い、いわゆる鉱物としての 空間だって言ってるわけですよ。その考え方って いうのはすごく共感する部分があって、野生的な 自然というのは、人の存在を寄せ付けないような、 人が行ったら死んじゃうような、そういう環境なん ですよ。だから人の存在がない都市っていう空間 と、野生的な自然ていうのは、意外と似ている空



引用: https://www.amazon.co.jp/ 都市という新しい自然 - 日野 - 啓三 /dp/464388066X

間であると。だから標高の高い山に登った時の感覚と、お正月とかお盆のころに行く都市の誰もいない環境、一人取り残されている感覚というのは意外と似ていて。だから、都市のプロジェクトっていうものと、野生的な自然環境内の場所でやるプロジェクトっていうものは、場所は違うんだけど感覚的にそんなに違いはないと、思いますね。

岩手県の遠野に、Queen's Meadow Country Houseっていうプロジェクトがあって、そこに真冬に行くとマイナス 20 度とかなんだよね。あの極寒の世界が広がっていて、真っ暗闇の世界が広がっているなかに、ポツンと建築があるんですよね。一歩外に出たら熊に襲われそうなくらい。すごく恐怖を感じる場所なんだけど、ただ自然環境が豊かでそこで人と馬が共生してますっていう、牧歌的なイメージとは実はかけ離れてる。結構厳しい環境があってですね。今日、私が言いたいポイントはそこなんです。都市だから、森の中だからなんか違うのかって言われると、なんかそれは違うんじゃないかなっていうふうに思うんですけど、どうです?西尾くんなんかは、スキー部だったんでしょ?

西尾:はい。(笑) 明日もスキー行きますね。

霜田: 冬山なんかはさ、スキー場でいるときはまだ人の存在はいるから、まああそこは、いわゆる都会ですよね、スキー場って。人が行き交っていて、寒いけど、でも、一歩コースを外れると死にそうじゃないですか。

阿部:うん、確かに、なるほど、そういう感じか。 なんか、都会って言葉が出てきたからよくわかっ た。

前本:だからこそ、都市だからとか、木々がたく さん生えてる森だからこういうことをするっていう 訳じゃなくて、さっきおっしゃっていたように、社 会性とか地域性とか、表面的じゃないところに着 目しながら、ランドスケープを取り扱っていくって いうことにつながっていくのですね。

霜田:まさしくそうだと思います。本質が変わらないっていうこと。スタンスは変わらないと思います。ただ場所は、それが立地する環境が違うからね。それをどう捉えるかってのが大事で、まあこれもランドスケープ論の授業の中でも言ってるんですけど、川の流域の一部としてそれぞれのプロジェクトを捉えるので、まあ大都市っていうのは、ほとんどの場合、こう河川の下流部にある。だけど、川っていうのはこう、山からどんどん流れてき

ていて、川の上流部に行くと今言った木々がいっぱい生えている自然環境がある訳ですよ。そういう視点で、ランドスケープのプロジェクトには取り組んでいますね。どの流域のどういう場所にそのプロジェクトのサイトがあるかっていう視点で見ようとはしていますね。

あと、あれかな私、ちょっと別の話になるけど、 制作のやつで、上田くんの中洲の提案は、面白 かったと思います。

上田成夢くん。

それってなんか先ほどの、都市とか都会の話に通じる感じもするし、あれは、都会の話になるんですかね。なんか、それすらも超越している感じに私は捉えたんで、講評の時に人文地理的なリサーチをしているような感じっていう、ようなことを言ったのを覚えてるんだけど。中洲っていう地理性というか、川の流れが作り出した土地をベースに、どんどんどんどん、雑居ビルが立ち並んでいって、その中における人のアクティビティの、一つのエコシステムのようなものが構築されていて。あそこを対象地にして、それに伴う、リサーチと提案っていうのは、すごく新しい感じがして、よかったなと。印象に残ってます。

西尾:スケールが大きいものを扱う中で、プロジェ クトをやるときのリサーチの方法っていうのはどの ようにやっているんですか?

霜田:リサーチはまずはあれですよね、どの川に 流域に属しているのかっていうのを、まず見ます よ。で、その流域の特性で、あとは地質、地形、 いわゆる自然条件っていうのを広域の視点から整 理します。ランドスケープの設計をするにあたっ て、ベースになっていくんですよね。だからその プロジェクトが起こる場所の、本質的な性格なん だと思うんですよ。それはすごく大事で、結局単 なる空間デザインなんじゃなくてランドスケープ デザインなんで。ランドスケープっていうのはラン ドっていう文字通り、大地とか土地ですよね。ス ケープっていうのは、何かを顕在化するっていう ことなんですよね。あらわにしていくということな んで。ランドスケープっていうのは、一つの言葉 にはなっているんだけど、言葉の意味としては、 土地の本質っていうのを認識して、それを顕在 化させていくっていう、そのプロセスの中で、い かにそのプロジェクトに求められる用途とか、人 間の営みみたいなものを重ねていくことが出来る かがポイントなので、ただ単にこう、手段として、 広域のスケールから土地を見ましょうと言ってい る訳ではなくて、デザインをやっていくにあたって、

それがすごく大事なよりどころにもなるし、それを抜きにしては語れないんですよ。

前本:本質、土地の本質を捉えるっていうことで まわ

霜田:だからまあ本質っていうのは表層的な部分では見えてこない、その下にある基層をまず捉えることが大事であるし、広域の視点で見ていかないと、基層がどうなっているのかが、見えてこないから広域の視点からリサーチをする訳ですよ。

時間基盤と空間基盤

前本:プロジェクトで広域なところからリサーチを始めていって、方向性や機能がどの領域に属するかわかってきてプロジェクトの方向性が決まると思うんですけど、リサーチのスケールを小さくしていくことでまたプロジェクトが面白くなっていったっていうことはあるんですか。リサーチを進めていって、街区的な大きな環境の中から得られる学び以外で面白さに発展して行くような事例はありましたか。

霜田:ありますよね。今言った流域とか気候とか 地質っていうのはすごく重要な自然条件なんです よね。広域の条件じゃないと見えてこないものだ からそういうふうに見ているわけです。一方で敷 地とか周りの周辺の街区、街のスケールの中から 見出されるコンテクストっていうものもあって、い わば、人文条件っていうものですよね。自然条件 と人文条件っていうものを重ねることによってい ろいろな、より精度の高いリサーチとその土地に 宿る本質のようなものが見えてくるはずなので私 としても両方の視点からリサーチをするようにして います。

阿部:そこに今おっしゃったことは、現状というか、 目とか手で触れてわかることだと思うんですけど、 さらにそこに距離っていうか授業でおっしゃってい たこととして、場所の風景には自分が今いるあり ありと体験している近景と遠景とかあって、距離 というものも頭に置かないといけないし、かつ、 時間軸みたいないろんなものが頭の中にないとで きないですよね。そこの整理じゃないけど何て言 うか...。

霜田:整理してあげようか (笑)

阿部:膨大だなって思うんですよね。 ランドスケー

プは。

霜田: そう思います。膨大だと思います。授業の中でも見せたスライドがあるのでそれをチラッとお見せしますけど。

私はこういう整理をしているんですよね。ランドス

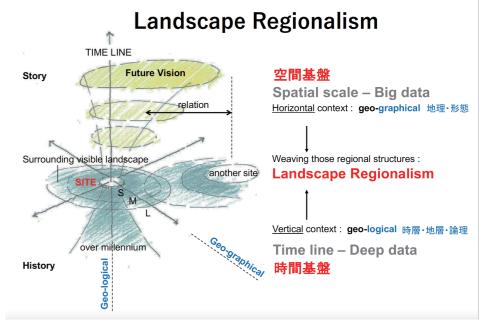
ケープリージョナリズムっていう考え方ですけれど

も、ある敷地っていうものはですね、どの場所で

もそうなんですけれど、時間軸と空間軸に係るも

のだと思うんですよ。縦軸に時間軸と、水平方向

に展開する空間スケールっていう2つの観点が 織り込まれているという風に考えるべきです。時 間軸っていうものは 100 年単位っていう短いもの じゃなくて 1000 年以上の歴史的な時間軸ってい うものを考えていくことによって逆時間軸の積み 上げというものがバネのようなもので、歴史が浅 い場所というのは浅いくらいしか想像できないん だけど、歴史のある場所のはそれに比例してバネ になって、より遠くの未来へのこの物語に繋がっ ていくはずだと思うんですね。ヒストリーというも のはストーリーになるじゃないですか。だからヒ ストリーということと未来のストーリーということは つながっているんです。そういう当たり前のことな んですけれども、そういう認識でいるとこういう地 域で関わる時間軸というより時間基盤ですね、そ れと空間の広がりというものは空間基盤。両者を を掛け合わせて顕在化されていくような地域環境 構造を母体として設計に取り組むということなん です。少し詳しく言うと時間軸というものは垂直の コンテクストね、文脈なんですが、英語でジオロ ジーって分かりますよね。で、ジオロジカルって 言葉があるんですけれどもこれはジオという意味 なんですが、これってジオとロジカルを掛け合わ せている言葉なんです。だから大地に関わる論理 性みたいなものが時間の基盤を追っていくと見え てくる。だから論理性なんです。時間軸というも のがどういう文脈で場所が成り立っているのかて いう論理なんです。ゆるぎない論理なんです。そ れに対して水平の広がりというものはホリゾンタ ルコンテクストということで、これって地理的なも のジオグラフィカルなものなんですよねジオグラ フィーという言葉も分解するとジオとグラフィカル =形態ですよね。っていう風に分けられて、だか ら大地の形態ですよね。地理的な形態のことを意 味しています。ランドスケープのデザインというも のはその両方の時空を組み合わせて考えていく。 これは建築にもそうだと思うんですけど、建築の 形態っていうのもいわば広域で見た時に地表面の 形態だと思うんですよジオグラフィカルのものだと 思うんですよ。地理形態としての建築なんじゃな いかな。



※ランドスケープ論授業スライド「空間基盤と時間基盤について」

西尾:地理形態としての建築 ...。

阿部:地層っていうのがその地質とかその土地 の理論そのものを表しているみたいな点で、この 時間軸というラインよりも基盤という言葉になって くるんですね。広がるというか積み重なるという

霜田:それはまさしくラインというか基盤であるっていう風に見たほうがいいかもしれない。世の中にはビッグデータとディープデータという2種類のデータがあって、時間基盤に関わるデータっていうものはディープデータなんですよね。これっていわば人の記憶です。多世代にまたがるつながりです。ディープなデータです。遺伝情報であり、記憶でもある。一般的に今言われているビッグデータは、いわばこの水平的な広がりの中で見えてくる膨大なデータのことなんですね。そういうものに我々は今取り囲まれているということなんですね。宇宙の一部にプロジェクトがあるんですっていうふうに捉えるべきなんじゃないでしょうか。これは全くの私の持論なので、参考までに。

前本:そういう考え方をランドスケープ論で学んだので、結構自分達の中にもあるというか、すごく共感して設計しているんだというのは思いましたね。

霜田:そうですか。

前本:はい、思いました。

霜田:この授業は2年生のときだから、すっかり 忘れてるんじゃない、みんな。

前本:スライドを見ると思い出すっていうか、それ以前に、この話を聞きながら考えてると自分が 設計している方法というか、考え方はすごい影響 を受けているなというのを思いながら聞いていま した。

霜田:でもまあ、あれでしょ。私の授業だけじゃなくて妹島さんとかランドスケープをキーワードにレクチャーとかされているわけでしょ。私が興味あるのは、私が言っている、こういうベタなランドスケープの世界と、建築の先生がおっしゃっているようなランドスケープのとらえ方って何か違うのかなっていう風には。私はよくわからないので。皆さん実習とか卒制でもそうですけど、いろんな方の指導を受けている中で何か違うみたいなものはあるのでしょうか。

前本:それはさっき僕が聞きたいなと思っていたんですけれど、人のためだけじゃないものがランドスケープかなと思っていたんですが、取り掛かりというか入りが大事だったり、もっと大きなものから方向性を決めているので、それが最終的にプロジェクトとして誰かお客さんだったり人のためであったとしても、人のためだけじゃないのになるのがランドスケープなんじゃないかなと、同じ質問をしようと思っていたところなんですけど、どうですかね。

阿部:でもさっき霜田先生がリサーチの仕方で 広域の視点から始まるっておっしゃっていたから、 それはもう、人のためとか以前にそのことを考え ざるを得ないから、そういう人のためとかいうより も大きな視点にならざるを得ないのかなって前本 の質問には思っちゃったけど、どうなんですかね。

霜田:人がいなくなればやっぱり自然の一部に わけですよ。バラバラになってね。この様子もな 戻っていくわけです。墓地もそうですよね。近年 私が取り組む樹林の中に作る墓苑なんかもそうい う視点で取り組んでいます。墓地として使ってい る間は墓地なんですよ。だけどやがて、その遺骨 が土に帰った途端にやっぱりそれはもう人間の場 所ではなくて自然界の一部に戻っていくし、森に 戻っていくんですよね。だからそういうものを年々 と繰り返しているわけです。ずっと昔に地球上で 亡くなった人間の遺骨はいつまでも残っているも のじゃなくて、いつまでも残っちゃうそうなのが現 在の墓ですよね。おおきな墓石を抱えるを墓地 を多く作ってしまってそれが半永久的に残ります、 永代供養します、って言ってずっと残り続けてしまあの場所にあり続けるわけですよね。かといって、 う状況が本当に正しい道なのか ...。

西尾: 僕の印象なんですけど、石の墓地って物と して主張があるなというか物としての主張が強い なっていうのは感じますね。石が並んでいる風景 を見た時に何かそういう印象を抱きました。

前本:古墳とかはこのあと山になったりしますよ ね。今の墓石だけはどうなるのか。あのまま残る のかなって思って。

霜田:近年、大震災が頻発していて、よく報道で は地震で墓石が倒れちゃいましたっていう様子が 報道されたりするけど、墓石が倒れて砕けちゃっ てバラバラになって、悲しい気持ちや自然の力へ の畏怖を感じる一方で、自然の美しさみたいなも のを感じてしまう自分もいる。きれいに磨かれ、 文字が刻まれた墓石が、地震によって、自然現象 によって崩れてバラバラになっていく現象に何ら かの審美性のようなものを感じてしまうんです。

阿部:廃墟的な感じですか。



※震災によって破壊されてしまった墓石 (引用) https://news.yahoo.co.jp/byline/kikkawamitsu ko/20210307-00226068/

前本:神殿のような感じですかね。

霜田:熊本城なんかも地震でね、石垣が崩れ ちゃって。私状況を見に行った時に、崩れた石 垣の石が熊本城の周りの公園に敷き並べてある んかありだなと思っていて。今の土木技術とかだ と一つ一つの石をナンバリングして、石を正確に 復元しちゃう技術があるんだけど、ものすごく時 間がかかるし、労力もかかるわけであって、そこ までして一旦崩れた石垣とか墓石っていうのを元 の姿に復元する意味がどこまであるのかってもの があってですね。別に壊れたままにするべきだと 言ってはないんだけどね。そういう変化を受容す るような社会になってもいいんじゃないかなって いうふうには思います。東日本大震災後に東北の 沿岸地域に長大な防潮堤が作られてしまって。そ れってもうほんと 1 回作ったら 100 年スケールで あの防波堤があるから安心だと言ってまた人が 戻ってきているかというとほとんどの地域で人口 減少が進んでいるし、戻ってこようにも来れない 状態がある地域もあるし、過剰なスペックを感じ る工事も散見されます。そんなことを私は最近考 えています。

西尾:最初は墓地っていうのは、ああいうものだっ ていうようなイメージがあって、本来はいろんな 形があるんだなと思った時に、その墓石ってもの が一種社会の上で一つの型として認識が広がて いるのかなって思いましたね。だから、ほんとに 墓地を考える人はいないっていうか。不思議な感

霜田:うん、世界を固定的で普遍的なものって いうふうに捉えすぎてる。いわゆる剛体として空 間を捉えがち。あと、人の記憶にしても何かこう モニュメントとか記念施設をつくると未来永劫そ の時に起こったことっていうのがそこに保存され て、固定化されるって信じすぎてる。でも、常に やっぱり地球上っていうのは変化し続けてるわけ であって、それは人間の時間尺度の中では捉えき れないものではあるんだけど、突如として大きな 自然災害が起こったときにその変化が早まる。基 本的には空間っていうのは剛体ではなくて、流体、 流れていくもの、変化していくものだと思うんです。 墓跡にしても、防潮堤にしてもそうだと思うんです けど、無理やり固定しちゃってる感じがすごくある んです。

阿部:お墓もこうあるべきだ、防潮堤もこうある

べきだ、とか色々なことが流体というふうな捉え 方がないから、高いものを作らなくちゃいけない というふうに思われて…だけど、コロナのせいで 時間がゆっくりになるというか自分の日常をゆっく りみれる機会が増えたときに、霜田さん自身の変 化はありましたか?

霜田:私はあんまり変化がない。元々、そういう 考え方持ってたから。近代化の中でさまざまな事 象が短縮化されたり効率化されたりしているわけ ですよ。時間をかけて本来的には行うべきことっ ていうのを時間をかけないでいかに短縮化してや るかっていうことの流れの中で、私としては本来 あるべき姿っていうのを時間をかけて行うべきだ と考えています。近代化の過程で短縮化された事 象について、それに関わる時間軸を引き延ばし、 長期の時間軸と重ねた時の空間への展開を試み てみたいと思っている。

阿部: 霜田先生自身は変わらないと思うんですけ ど、周りが気づき始めることは多くなっていると 思っていて、霜田先生に共感する人は多くなって るのかなって思ってました。(笑)

前本:プロジェクト進める時に、ランドスケープ デザインと建築設計が共同するということをおっ しゃってたと思うんですけど、ランドスケープの側 から建築に要求することはありますか?

霜田:要求はしないですね。逆にだから、ラン ドスケープの設計の専門家と一緒にやりたいって いう建築家から声がかかってくることが多いので、 そういう人は私たちの考え方を共感してるし、い きなり飛び込みで一緒にやりましょうっていう人 は、街中のナンパみたいなものですよ...。(笑) ついて行かないでしょ、普通。(笑)よっぽどお いしい仕事であっても。おいしい仕事には必ず裏 がある。みなさん気をつけてくださいね。



※東日本大震災後にできた防波堤 https://jp.reuters.com/article/wider-image-jp-sea-wallsidJPKCN1GL182

庭とランドスケープの違い

西尾:庭とランドスケープの違いって何でしょうか。

霜田:庭って囲まれた箱庭みたいなものではない ですから、ランドスケープの一部ですよ。国によっ てもニュアンスの違いはあるんですけど、中国と か日本っていうアジア地域の庭園っていうのは自 然環境の一部ですよ。人間の視点から捉え直した 自然の状態をちょっと加工した空間が庭になって

霜田:庭に関する議論は尽きないんですよ。 いる。それが地域の自然環境の文脈から外れて ない。各国そうでしょうね。土地の文脈から外れ 西尾:庭って主観的っていうか、人間がそこを庭 ないことですよ。今あるそこの土地の性質とか本 質っていうのを活かしながら庭園空間を作ってい 思いました。 る。庭ってさ、建築の空間とランドスケープの広 域の空間の中間領域ですよ。何も囲まれた、綺 麗に整備された日本庭園だけが、庭と呼べるの かというとそうではない。例えば、農家があって、 家があってその周りの農地とか裏山があって、そ の中間領域に家の敷地があるわけですよ。そした らそこの場所で作業したり、あるいは鶏なんかを 飼ってるわけですよ。鶏ってなんでニワトリってい うか、農家の庭で飼ってる鳥だからですよ。農家 の屋外の空間って二ワって呼ばれてるんですよ。 にわなんですよ、作業場。人間がそこに関わるか。 建築との関わり、人間の関わり、家の関わりが深 い屋外空間は庭ですよ。

西尾:じゃあ、墓地は庭ですか。

霜田:庭になりうるでしょう。 みなさん進路はどう するんですか。

計画研究室に、阿部は東工大の土肥研究室に進 みます。

霜田:今Y-GSAの寺田真理子さんと話をしてて、 庭について設計のワークショップをY-GSAの学 生と千葉大のうちの研究室と一緒にやりたいねっ て話をしてて・・・

西尾:おお・・・やりたいです。

として認識するかどうかで違うのかなっていうのを

霜田:西沢文隆さんって知ってますか。庭園論っ ていう本がある。それは、すごく分かりやすいと 思います。

ちょうど寺田さんに送った資料があって(笑)古 本で買ったやつがやつがたまたまサイン入りで (笑) こういう目次になっていて、庭とか何か。 これ読むと、みなさんも共感できると思いますよ。 建築と庭園の接触点に関する用語とかそういうの が書いてある。冒頭で書かれてるように、「庭と は人間が住まえるように人間が、その住居のス ケールに合わせて、自然を飼いならせたもの。そ の行為によって生まれ出る第二の自然である」と。 色々書いてありますけど、「神を祭るところを斎庭、 勉強するところを学びの庭というように、庭とか何 かをする特定の場所を意味する言葉であって、農 家では晴れた日は家のすぐ前で、雨の日は土間 で仕事をする、農事作業をするところが庭である。 屋外の庭も屋内の土間も屋外の戸外もとも庭と呼 前本:西尾と前本は Y-GSA に進みます。鍋平は んだのである。今、庭園を庭と呼んでいるが、そ



※西沢文隆 小論集 2 「庭園論 I」(1975) 相模書房

れは愉楽の庭、遊園である。」そこへ降り立って 楽しむこともあれば、降りずに室内から、路地や ベランダから、テラスから楽しむこともある。だか ら庭の始まりっていうのは、建築があるところから スタートしてると思います。建築があることにとっ て、例えばこういうすごく厳しい自然環境に中で、 お寺のお堂が建てられていて、周辺環境が庭化

あとは、生業ですよ。畑で土を耕して、植物を育 てたり、そういうことも庭の始まりですよ。農耕時 代に入って定住化が進んだ時に、身近な家の周 りに庭が形成されてきた。そういう流れがあるこ とが書かれています。

前本:これは課題図書ですね。(笑)

西尾:この本読みます。(笑)

もうそろそろお時間なので...。 お忙しい中、本日はありがとうございました。





Profile 霜田亮祐 Ryosuke Shimoda

1974 埼玉県生まれ 1998 千葉大学園芸学部卒業 2000 千葉大学大学院修了 2003 ハーバード大学 GSD 修了 2003-2004 Tom Leader Studio

2004-2013 組織設計 PLACEMEDIA 2013 HUMUS landscape

architecture Inc. 設立

2015.4- 千葉大学大学院園芸学研究科・准教授